

ウィーンの郵便貯金局 1906年 オットー・ワグナー

内抱する都市的空間

1903年、ウィーンで郵便貯金局の設計コンペが行われ、オットー・ワグナーの案が選ばれた。主要部分を含む1期工事の完成は1906年。国の中枢機関だが、市民が利用する出納窓口ホールを備えている。

敷地は旧市街を囲むリンク大通りの内側にあり、全辺街路に接する変形六角形の一街区。地上7階、地下1階建てで片廊下の事務棟が中庭を内に街路に沿って建てられた。中庭は事務棟2棟を縦に配置して3分割し、中央部分にガラスの屋根を掛けて窓口ホールとした。硬い外郭の事務棟が市民使用の柔和な光のホールを中心に抱く古典的だが明快な全体構成であり、街並みを形成する都市建築でもある。

ホールは2階レベルにある。街路から列柱間の入口をくぐり、階段を上りドアを通過するとガラスの屋根と天井を高く戴く光に満ちた空間が現前する。

光を地下室に通すため中央部分の床はガラスブロック敷きで、壁、天井とも硬い材料なのに、記憶に残るホールは静謐である。また、都市空間の一部のような質を感じる。鉄骨にガラス屋根の駅舎等の技術を洗練、昇華し、内部化した都市的空間、外的内部の空間だ。一種のアトリウムかと思うが、中央部分の天井がヴォールト状で高く、屋根、天井を支える鉄骨柱列の存在は、建築の中に別の建物が入れ子のごとく建つ印象を与える。

平滑な白色壁面、腰は灰色大理石の平板で、外部同様、新素材アルミの鋳で留めている。暖房給気筒や鉄骨柱の下部被覆もアルミ板加工。歴史様式的な要素は一切なく、全体に即物的なしつらえだが、隅々まで精妙に納めている。

なぜ、このようなホールを構想したのだろうか。以前、資本家や法人利用の様式主義の連邦銀行を手掛けていた。たいしてこちらは市民が日常的に訪れる貯金局であり、拡大する市民の活動と技術の進歩に相応しい晴朗な空間を追究した結果であろう。その意味でも、このホール空間はモダニズム建築の先駆である。

ワグナーは著書「近代建築」で創造の出発点は近代生活だと唱え、真実性と実際性の追求、構造技術と材料に精通するよう建築家に求めた。この建築はその思想を体現し、20世紀の建築の行方を透視した自信を秘めて建っている。

20世紀は、鉄骨造やRC造、ガラス製造等の19世紀の技術的成果をさまざまな建築の創造に適用し展開した。

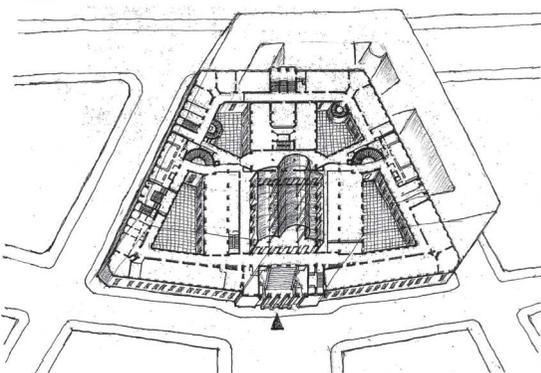
同時に、設計とは、人々がそこで生きる空間を要求にもとづき効果的に秩序づけることと自覚した。本稿は、形態、オブジェとしての建築よりも、内外に生みだされた空間に注目し、20世紀の建築空間の展開とその価値を確かめる。



入口周辺部。外装:石板アル鋳留め。キャンピーと上部手摺もアルミ材



出納窓口ホール。天井の上に鉄骨トラス。上に切り妻ガラス屋根



全体の空間構成図(ホール上部のトラスとガラス屋根は省略)



(左)ホールのガラスブロックの床。柱被覆と暖房給気筒はアルミ板加工
(右)ホール下の地下室。天井は床のガラスブロック。靴影が淡く見える